

コロナ禍 三様

小道 周帆

(一) 新入社員の場合

伊藤純也は二〇二〇年四月一日に、急成長が話題になっている中堅の損害保険会社に入社した。ところが、新型コロナウイルスが急激に拡大し、四月七日には「緊急事態宣言」が出されると予告されていたため、従来の入社式は中止され、オンライン開催となった。

テレワーク用に会社から配布された専用パソコンの画面を見て、社長の挨拶や先輩社員の激励の言葉、そして新入社員代表の挨拶があったものの、純也が難関を突破してその会社に入社した感激は余りなく、当事者というよりは観客として入社式を見ているような気がした。

人事部長の研修内容の説明があり、国や自治体からの出社をできる限り避けるようにという通達に従って、この後の研修はオンラインで実施するという。これじゃ同期の仲間との懇談もないのかと思っていたが、会社もそれなりに気を遣ってくれているようで、五十人の新入社員を五つのグループに分け、グループ毎にリモートによる懇談の場が設けられた。純也はアイウエオ順でA班となった。司会役は人事部の原口明穂さんだった。ううくん、美人だ。

「入社三年目の原口です。新入社員の皆さんの研修・教育担当ですが、実は今年初めて担当となり、慣れないことばかりですので、よろしくお願いします。趣味は音楽…、いえカラオケです（笑い）。恋人はいませんよ」

あの顔で恋人がいないなんて、よく言うよ。だれとカラオケに行っているのかな。質問したいな。

「ではA班の皆さんからそれぞれ自己紹介を、お互いに親しみ感が持てるような気楽な感じでやってくださいね。最初は安藤さん、どうぞ」

「安藤です。画面をアップしないでください。学生時代はラグビーをやっていたので、傷だらけの顔なもんで…。出身は九州男児、そう肥後もっこすと呼ばれる正義感の強い男を生む熊本です。学生時代はラクビー漬けで、よくぞ当社に入社できたものだど仲間と言われています。社会人になったので、今までの取り返しのつもりで勉強しようと思っています。研修では一番を目指し頑張り

ます！（照れ笑いの顔がアップで映る）

「頼もしいですね。次は五十嵐美晴さん、お願いします」

「五十嵐美晴と申します。よろしくお願いします。女子大出身ですので、画面を通してでも男性に見られると思うと緊張します。趣味と言えばお花とお茶が女子大では定番ですが、わたしには一切関係なく、ラクロスに明け暮れています。カラオケも好きですよ。原口さん、よろしく」

「コロナが終わればみんなで行きたいですね。次は伊藤純也さんですね。どうぞ」

「伊藤純也です。東京生まれです。でも両親は父が福島の会津で、母が伊那市の高遠です。両親が結ばれた縁は、高遠藩主の保科正之公が会津松平家初代藩主となり、多くの家臣が会津に行き、それ以来会津と高遠は親しい関係があり、人の交流もあつたようです。そんなことを子供の頃から聞いており、歴史に興味を持っています。なお、東京育ちですがプロ野球はどういう訳か阪神の大ファンです」

少し理屈っぽい自己紹介だったと反省。A班は女性が三人で、男性は七人。それぞれが自己紹介をし終えて、しばし懇談の時間があつた。自己紹介についての質問があり、純也には大阪人の大西武夫君から

「東京の人なんやのに阪神ファンとは有り難いわ。今年の調子はどんなもんかいな」

大西君は自己紹介も大阪弁の絶妙な味が出ており、大変印象に残っていた。こんなことを言っていた。

「浪速男の大西です。学生時代は仲間と素人漫才をやつとりしました。相方は坂東という奴で、コンビ名は名字の西と東から『トーザイ・トーザイ』ですわ。その坂東はどこに就職したかというと、我が社より下位の東邦損保はんですね。いずれお前の会社を抜いてみせるからと言つとりしましたけど、アホいえ、ムリ無理というとききましたさかい、今の調子をさらに引き上げて頑張りまひよ」

「そりや顔ですわ。男前とは言いませんが、まあ普通よりはましな顔でしょ。これじゃ売れへんでしょ？」

この懇談会が会社で顔を会わせてやっておれば、この後は間違ひなく歌舞伎町に繰り出していたに違ひない。このグループ別の懇談会のお陰で、オンライン入社式の味気無さ、感激の無さが一変し、仲間と競い合つての会社生活に向

かつてやる気が出てきた。

いかにも才媛という感じの藤岡さんから、原口さんにお問い合わせがありますとこんな申し出をしていた。

「入社式はあまり実感が出ませんでした。でも、この懇談会で入社したという実感が出てきました。この後の研修等でも、こうしたグループ別で話し合える場を設けていただきたいと思います。よろしくお願いします」

「ぜひそうなるような研修会にしたいです。私が入社した時の研修会は顔を会わせてはいましたが、講師の一方通行の話ばかりで、正直言って余り興味が持てませんでした。今年はオンラインでやるのですから、今まで以上に中身の濃い興味深い研修になるように工夫をしたいと思います。リモートで会えるのが楽しみだと思えるような研修にします。乞うご期待です！」

休日には、学生時代の仲間と飲みながらそれぞれの会社の様子を語り合うはずだった。しかし、コロナ禍ではそうもいかない。会社からは、居酒屋等でコロナに罹れば大騒ぎになることから不要不急の外出を自粛するよう要請されていた。やむなくリモートでの情報交換となっている。

コロナ禍の入社故に、友人たちはこんな愚痴めいたことを言っていた。

「俺の会社はビジネスマナーの動画を見るだけの研修が続き、全く面白くない。雑談の時間がないので、同期入社の人顔も分からず、社会人になった実感が未だにしない」

「飲む機会がなくて申し訳ないと先輩社員に言われてはいるものの、新入社員歓迎会をしてもらっていないため、歓迎されていないのかとひねくれてしまう。たまの出社日には昼食くらいは誘ってもらいたいものだ」

「俺だけかもしれないが、テレワークのために生活のリズムがつかめずに困っている。休憩するタイミングやどこで終りにするのが分からず、つついとおバーワークになっているように思う」

「上司や同僚とはオンラインでは会ってはいるものの、人間関係を構築する機会がなく、なんだか仕事のみで冷たい関係になってしまっているようで不安だ」

「テレワークは通勤時間がかからず、作業効率が良いとされているけれど、新入社員にとっては会社全体がどのように動いているのかが見えず、将来の方向が解らない」

「たんとんと仕事をしているけれど、自分の仕事はどう役立っているのか、どう評価されているのかが気になるものの、リモートでは上司の細かな表情まで

は掴めず、やりがい失せてしまう」

「テレワークのために現場配属の時期が遅れ、業務体験を通じた先輩の指導が受けられず、これでいいのかと不安になる」

少数派ではあるがこんな意見もあった。

「俺はのんびり屋なので、他人の様子を見ないで研修や自分の仕事を自分のペースで出来るのは嬉しい」

「考えようによれば、家に居て、適当にリモートで受け答えしているだけで給料が貰えるんだから楽勝よ」

「まあなるようになるだろう。リモートとはいえ、俺たちの良さや能力をどう引き出そうとしているのかシッカリ見ておきたい」

いろんな意見が出ていたが、純也はコロナ禍の下で、それぞれの会社、個人がどう前向きにその困難や不安を捉え、それを克服するかが試されているのではないかと思う。

損保会社に入社したからには、このコロナをはじめとしたウイルスによる損害を補填する商品を開発してみようと強く心に誓った。

(二) 三十代夫婦の（性）生活

長谷部博は四月に係長に昇格し、部下を持てる身になったのに、コロナのお陰で昇進祝いも部下との懇談もない。それぞれが家庭でテレワークをしており、週に一回だけ出社している。出社日が曜日ごとの輪番制で、出社した者が当番司会役になってリモートによる状況報告や打ち合わせをしており、係長といえども係員と変わらない感じだ。できるだけ俺がリーダーだという感じを出すように発言しているものの、部下にはどう映っているのか気になるところだ。

通勤時間がない、帰りの寄り道もない刺激のない毎日だから、せめて夜ぐらいはと、昨夜は女房の布団に潜り込んだ。

「いいだろう？」

「止めてよ。疲れているの、ゆっくり寝かせてよ」

なんてことだ。もうこれで一週間も拒否されている。三十代だと三日に一度が常識なのに、どうなっているのだ。コロナ前は女房が求めてきていたのに……。毎日、四六時中顔を会わせているから新鮮さがないということだろうか。すぐ

さま美知恵の寝息が聞こえた。疲れているのは本当なんだな。だけど夫婦愛を確かめるのが夫婦間のセックスだろうよ。

思えば新婚時代は毎日だった。子供が欲しい気持ちもあったが、それ以上に愛があり、新鮮さがあり、セックスの底知れぬ深みもあった。子供が生まれてからは少し変わったものの、拒否されることはなかった。コロナの所為なのか。

今の美知恵にとっては「亭主元気で留守がいい」とは、よく出来た言葉だとつくづく思う。以前の主人は毎日、決まった時間に出社して、帰宅は早くても九時だった。時には午前様もあった頃が懐かしい。主人は家庭や育児のことは一切口出ししない。当然ながら家庭での主導権を美知恵が握っており、やりがいもあった。

ところが、コロナ禍でのテレワークになると、主人が一日中家に居るがため「名もなき家事」が増えてしまった。例えば、昼食だ。今までは残り物を自分なりに献立していたのに。今はあれこれと主人の注文がうるさい。買い物だつて量が増え、大変なのだ。さらにテレワークでお客様に電話を掛けているため、テレビも自由に観られない。子供の泣き声を出させないように外に連れ出したりもしている。一番頭にきているのはオンライン飲み会だ。画面につまみが写るからといって、見栄張りの主人はつまみ自慢をしたらしく、いろいろとうるさい。自分で用意すればいいものを私の役割だと思っている。

そんなことで、主人が一日家に居るだけでストレスが溜まり、さらに「名もなき家事」に忙殺され、テレワークの主人を持つ主婦はみんな疲れているのだ。確かにコロナ前の夜は私から求めることもあったが、その時、主人は何と言ったか。

「俺、仕事で疲れている。いろいろと面倒なことを考えなきゃならん。そんな気になれない。すまん」と、言っていたではないか。

でも、その頃は三日に一度はお互いにまあ義務みたいなもんだと言いながらも楽しんでいた。コロナがそれを狂わしたように思う。

テレビの深夜のワイドショーで『コロナ禍の新しい夫婦生活』をテーマにした番組が放映されると、新聞のラテ欄に紹介記事があった。

「あなた、こんな番組があるようよ。参考にまで一緒に見てみようよ」

「別に新しい夫婦生活でもないだろう。今のままでいいじゃないのか」

「でも、皆さんいろいろと工夫しているみたいよ。気に入れば我が家でも採り入れればいいし、気に入らなければ今のままでもいいでしょう。まずは見てのお楽しみで、どう？」

「わかった。明日は休日だから夜遅くでも大丈夫だ。その後は久し振りに楽しませてくれるか。どうだい」

テレビとしては深夜の番組ということもあって、いきなりコロナ禍の性生活のアンケート結果が紹介された。(注1)

Q コロナ禍での夫婦のセックスの頻度は「低くなったか」それとも「高くなったか」

A アンケート結果を棒グラフで、年代別・男女別に示された。一目瞭然、頻度が「低くなった人」が、各年代、男女とも「高くなった人」よりも三倍にもなっている。とりわけ三十代の女性は圧倒的に頻度低下していると答えており、高くなった人はゼロだ。

Q 夫婦間でセックス中に積極的に言葉を交わしますか？

A 「いいえ」60% 「はい」40%と円グラフで表示。

Q 前戯、後戯を含めてセックスにかかる平均時間は？

A ・10分未満 12% ・10〜30分未満 39%
・30分〜1時間未満 35% ・1時間以上 14%。

これも円グラフが表示され、分布が分かり易い。

モザイクを掛けた三十歳代の主婦が登場し、インタビューに答えていた。

——三十代主婦のセックス頻度が低くなっていることに、どう思いますか？

「当然だと思います。子供の世話に加えて、テレワークで主人はいつも家に居る訳ですから、家事も色々増えています。全く家事を手伝おうとしないのですから、誰だっって頭に来ます。そんな人にこれ以上は尽くしたくないのでは…」
——なるほど、他にはどんなことが考えられますか？

「そうですね…結婚して十年近くになりますから、お互いにまあいいやとの慣れがあるのかもしれないね。コロナ前だと主人は会社に行っていましたから、それなりに刺激もありましたが、今じゃいつも一緒に居るのですから、いまさらという感じですね」

三十代の男性はどう思っているのでしょうか。

モザイクをかけたサラリーマン風の男性が答えていた。

「ちよつとショックですね。家に居る時間が長いのですから、お互いの役割や状況を理解し合えるはずなのに…。家内の仕事を手伝いたいの思いはあるのですよ。けど何をやっていいのか分からないのが正直なところですよ。このことが夫婦間の愛の頻度を低くしているとは思いません。それとこれとは別でしように…」

「やっぱり、主婦の気持ちも亭主たちは理解できていないわよ。だって、食べたら食べばっなし、脱いだら脱ぎっぱなし。『片づけてよ』と言っても『あとで済ますんですよ。そんな主人の態度を許せますか！』」

反論したそうな男性を置いて、女性アドバイザーが登場し、こんな感想を述べていた。

「これだとコロナ禍は将来の人口問題に影響が出ますね。三十代と言えば、第二子の誕生を迎えるはずなのですが…。昔ニューヨークで長期の停電が起こった時には『停電ベビー』が多く誕生したんですよ。ところが今回はコロナ禍により夜は夫婦別々といった感じですね。間違いなく新生児が減ってしまいますね」
ここで一旦CMタイム。

「あなたどう？」

「拒否しているのは美知恵だけかと思っていたけれど、みんな同じ問題を抱えているんだね」

「インタビューで言っていたけれど、主婦の仕事を手伝う気はあるの？」

「あるよ。あの男性が答えていたが、何をすればいいのかが分かってないんだよ。一度整理して教えてもらいたいな」

「分担の整理をやりましょうよ。やった以上はあなたの役割は必ず責任を持ってやるのよ。言い訳はダメよ」

「ハイ、おっしゃる通り、必ずやります！忘れていればご指摘よろしく！」

「話は変わるが、セックスにかける時間やセックス中の会話は参考になったな」
「そうね、十分未満とは言わないけれど、あなたは短いわね。会話はほとんどないしね」

「反省します」

CMのあと、再び先のアドバイザーが登場し、コロナ禍での夫婦仲を保つための四つの留意点が話されていた。

① 家事の分担について話し合うこと。

- ② 家が狭くても、テレワーク用の空間を確保し、お互いに気遣いせずにごせるように工夫すること。
- ③ 一日に一時間ずつ互いに自由時間を設定し、夫婦一緒にいることから生じるストレスを発散させること。
- ④ その他、お互いに「夫婦関係はこれでいいのかな」と考える機会を作り、コミュニケーションを図ること。

博も美知恵もこの番組から吹っ切れた感じがし、満足した気持ちになった。番組はまだ続くようだが、もう二人にはこれ以上の用はない。

一時間を目指して、お互いに会話しながらも激しく、愛に溢れた夜を過ごすとうと寝室に向かった。

(注1) 『Tarzan』 No.816 2021年8月5日号より

(三) 定年後の継続雇用を辞めた高齢者

多くの企業は「高齢者雇用安定法」に基づき、定年は六十歳であっても、その後は再雇用として六十五歳までは働き続けられる制度を導入している。平山修二の会社も継続雇用制度により、給料は減るものの同じ会社で働けるので、定年退職者にとっては経済的にも精神的にも有難いものであった。しかし、定年を迎えて三年が経ってコロナ禍が襲って来るとは予想もしなかった。

コロナ禍で何が変わったかという点、まずは会社の業績が悪くなってきた。平山にとってはそれ以上に、テレワークにより家庭で各自が仕事をするようになったことだ。永年に亘り身に付いてきた会社という組織で、得意先や仲間とのコミュニケーションを通じた仕事がなくなってしまうのだ。

「平山さん、来月からはテレワークになりますので、よろしく」と言われて面食らった。

テレワークというのだから、電話を中心に取引先やお客さんとの連絡する仕事だと思っていた。研修会での説明を聞いて、テレワークとは、情報通信技術(ICT = Information and Communication Technology)を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方のことだと、ようやく理解できた。

何でテレワークというのかというと、テレはTeelではなく、Tele=離

れた所という意味だと初めて知った。お恥ずかしい次第だ。

平山の得意とする営業は、取引先の担当者と顔を突き合わせ、接待も含めて人間関係を作り、いろんな情報を得て、それに即した営業提案をして成果を挙げるやり方だ。こうした営業には自信があり、誇りもある。再雇用後もこれで多くの得意先に信用も得ていた。

ところが、説明会では

「コロナ禍のテレワークでは、ウェブマーケティングやデータの掘り起こしによるネットを駆使したデジタル業務への対応が不可欠です」という。

何んだ、それは……。そんなことで営業ができるのかよという反発の気持ちが生じた。テレワークでは同僚との飲みニケーションもなく、愚痴話もできない。ひたすらパソコンに向かって打ち込むだけの仕事なんて、やっつけられるか！と怒りすら覚えた。会社がひたすらデジタル業務を推進する裏には、コロナ禍で業績が悪くなったが故に、再雇用者をはじめ高齢者を切る狙いがあるのに違いない。

確かに会社の置かれている今の状況は厳しい。永年働いてきた会社には未来永劫に発展して欲しいと思う。六十歳定年時にはそれなりの退職金を頂いており、蓄えもある。愛社精神があるだけに、反発や怒りよりも会社の窮乏に役に立つのなら辞めるのが愛社精神というものだ。そんなことから六十三歳で自ら申し出て、自由の身になった。

平山には退職後、自由の身になったから何かをやろうという予定はなかった。将来を見据えた考えもないまま、コロナの所為で会社への義侠心から辞めたことを少しは反省したが、まあ何とかなるだろう。

退職後の最初のイベントは女房と海外旅行と考えていたが、コロナ禍で全てのツアーは中止となっていた。たまには会社のOB仲間との飲み会やゴルフコンペに参加しようとの思いも、非常事態宣言の下では自粛せざるを得ない現実。今更ながら気づいた。なんと不自由な世の中になったもんだ。家に居るしか術がないとは情けない。

そんな訳で毎日が暇。ラジオ体操をし、狭い庭の水やりや雑草抜きもすぐに終わってしまう。朝の散歩と朝食をとり朝刊を読み終えると、後はテレビしかない。朝のワイドショーは主婦向けであり、全くつまらない。やむなくパソコンから無料で配信されている昔の映画を見るしかない。

午後には女房が買い物に行くと言うので、荷物くらいは持ってやろうと親切

心から

「わしも一緒に行くぞ」と声をかけてみた。

「いいわよ、あんたが一緒じゃ、落ち着かないし買う物も買えなくなるから」とつれない。

後で知ったのだが、これを『ワシも族』と言うらしい。そして奥さんの後をまわり付いて歩く姿を『濡れ落ち葉』と言う。おお、企業戦士の成れの果てがこれか。俺はそうはならないぞ！

女房曰く、

「働いていないのだから、私との関係はヒフティ・ヒフティでしょ。暇だったら家事をやりなさいよ。料理は出来ないでしょうから、食後の片付けと食器洗いはあなたの仕事よ」

「そうそう、部屋掃除もお願いよ。掃除機があるから運動のつもりでどうぞ」辞めてから家に居て思うことだが、やたら女房が威張り、亭主を使いこなそうとする。積年の恨みをここぞと解消しているようにも映る。

それにしても女房は毎日をどう過ごしているのだろうか。今まで気にもしなかったが、買い物以外にも何かと出掛けている。地域に密着しているようであらと交際相手が多いようだ。ご近所もあれば学校時代の子供を通じた母親との繋がりもあるようだ。

「私はねえ、体操教室やプール、それに水彩画の会等々で忙しいのよ」

俺も趣味の会を見つけなくてはと、市の広報誌を眺めてみると、いろんな会の紹介があった。しかしなあ、今さら他人の指導も受けるのは嫌だ。囲碁や将棋の趣味もないし、絵画も興味ないな。

取り敢えずは俺でもすぐに馴染める「ウォーキングの会」に入ってみるか。月二回開催で十キロばかりを歩くようだ。ただし、コロナ禍のため本年の活動は休止とあった。メンバーを訊くと女性が七割で、女性の年齢は五十歳代が中心、男性は六十歳以上だという。なるほど、子育てを終えた女性と定年を迎えた男性のグループという訳だな。

「再開されたときには入会します。よろしく願います」
と事務局長に連絡しておいた。これで一つ解決だ。

そうだ、ウォーキングから派生して考えたのは、身体が鈍らないよう、若さを保てるよう、体力維持が必要だ。先日、新聞の折り込み広告にスポーツクラブの入会案内があった。詳しく見てみよう。

いろんなコースがあるようだが、平日アフターヌーン・コースがいい。午後からの参加で十分だ。各種の筋トレ・マシーンがあり、プログラムにはエアロビ、ヨガ、太極拳、腰痛予防体操、それにゴルフの室内打ちっぱなしがある。これは良い。スカッシュコートやプールも備えている。

「よっし！決めた」

決めれば即、行動と入会手続きをした。コロナ禍のため、マスク着用が条件で、それぞれのプログラムも三密を避けるため参加人数の制限があるという。そのためスマホを通じて事前申し込みをする必要があり、スマホにスポーツクラブのアプリを入れる手続きを丁寧に教えてもらった。

コロナ禍で会社はテレワーク導入したが、スポーツクラブではスマホを活用した方式をとっているのに驚いた。パソコンやスマホに熟知しないと取り残されると実感した。やっぱり世の中は変わっていくのだ。

続いて行きなれない図書館に思い切って出掛けてみた。ここでもコロナ禍の影響で入館者数の制限と滞在時間は一時間以内という。入館してみると、何と高齢者の多いことか。雑誌コーナーの席は満員。ソファアに座って昼寝をしている御仁もいる。取り敢えず司馬遼太郎の本を取り出して読んでみる。ふとボードの張り紙を見ると、

〓〓読書サークルに入りませんか〓〓とあった。

担当の方に訊ねると、三つの読書サークルがあるという。いずれも課題本を読んで意見交換をしたり、近くであれば小説の舞台となった場所を訪ねたりしているようだ。各サークルの人数は二十人以下で、皆さん和気あいあいでおられますよとの説明を頂いた。

「いろんな年齢の方から刺激を受けたいので、年齢の一番ばらついた読書サークルに入ってみたいのですが…」

「ああ、それじゃ私の入っている『読書の会 浪漫』がいいですよ。大学生や現役のサラリーマンの方、もちろん主婦の方もいらっしゃいます。逆に高齢者の方が少ないので、平山さんのような社会経験豊富な方が加わっていただくと議論に幅が出てありがたいです」

「いやあ、余り役には立ちませんが、皆さんに負けないようにしっかりと読み、意見が言えるように勉強します。ぜひ入会させてください」

「わかりました。紹介者は私ということで、会員の了解後に入会いただきます」
思ってもいない展開だ。紹介者になってくれたのは図書館でパートをしてい

る大原さんで、年齢は四十歳くらい。学生が四人もいるという。若い人との接点が高齢者を若返らせる秘訣だと何かの本で読んだことがあった。

ラッキー！

早速、『読書サークル 浪漫』の事務担当をしている大原さんから詳しい説明を頂いた。

学生の他に現役の勤め人や学校の先生もいらつしやる関係で、

・月例会は毎月第二日曜日の二時から

・開催場所は市のコミュニケーション・センターの会議室

ただしコロナ禍の関係で、目下はリモートで開催

・会費は年間五千円

・入会申込書に住所、氏名、生年月日、電話番号、パソコンアドレスを記入

翌日、大原さんから全員が歓迎していますと入会承認の通知がメールで来た。併せて、来月の課題本 石沢麻依著『貝に続く場所にて』とある。

だれ？こんな作者は知らないな。通知文をよくみると、今年の芥川賞受賞作品だと記載してあった。

やる気が出てきたぞ。早速、本屋で新刊書を購入した。

今まで毎日が暇だと嘆いていたのが嘘のようになった。平日の午後はスポーツクラブ通い。読書サークルの課題本を深読みし、関連の本も読まねばならないだろう。

そうすれば空いている午前中も何かで埋めたいとの強い気持ちが生じてきた。パソコンで見る無料映画なんてつまらない時間潰しから脱しなければ新たな平山にはなれない。

そうだ、現役時代の営業には目標数値というノルマがあった。だから頑張れたのだ。退職後も自分にノルマを課してみれば、それに向かう力が出るに違いない。いろいろと当たってみて取って置きのものに気付いた。

日本には資格・検定が百数種類もある。趣味的なものから教養、語学、技術関係の資格や実践的・実務的なものまで。易しいものもあれば「気象予報士」の試験のように合格率5%という超難関なものもある。いずれにせよ通信教育やテキストに沿って自習し、レポートの提出と資格・検定のための試験がある。

ウーム、どれにするか。年齢を考えて教養や趣味的なのがいいだろう。よく知られているのは「漢字能力検定」。他にも「四字熟語検定」や「作文検定」

もある。さらに『世界遺産検定』や「ご当地観光検定」「ことわざ検定」「歴史能力検定」「星空検定」「神社検定」もあれば「仏教検定」もある。変わったところでは「ねこ検定」や「温泉ソムリエ検定」というのもある。

簡単で、出題の数も少なそうな「四字熟語検定」や「ことわざ検定」にまずはチャレンジして、次々と資格を得てみたい。

これらの勉強、準備を午前や夜の時間に充てよう。

毎日はまだ暇ではない。一日いっぱい何らかの用事で時間が埋まった。

ウーン、俺の人生が面白そうになったぞ！

コロナ禍のお陰で、充実したセカンドライフが送れること間違いなし。今やコロナに感謝するかな。

完

10758字

(2021.9.12)